

運河の水面に「国際交流」の 歴史風景が浮かぶ

神谷 智●愛知大学教授

名古屋市中村区・中川区



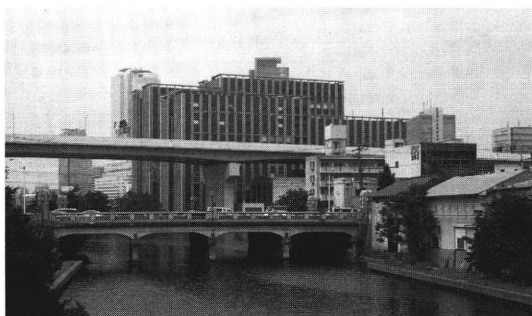
本年四月に新設された愛知大学新名古屋校舎は、名古屋市中村区の東南端で中川区との区境の、通称「笹島」と呼ばれる地にある。ここは、北東から南西へ近鉄・JR・通称「あおなみ線」が通り、東も新幹線・JR・名鉄が南北に走り、さらに南は名古屋高速五号線が東西に走るといふ、三方が鉄道と高速道路の高架に囲まれた三角地帯となっている。

新校舎の北には国際協力機構中部国際センター（JICA中部）、北東にライブハウスと娯楽飲食施設があるだけで、それ以外の周辺は広大な造成地のままである。新校舎の高層階から北を望むと、JRセントラルタワーズやミッドランドスクウェアなどの名古屋駅前高層ビル群が間近にそびえて見える。また南は、低層階では三井倉庫のトランクルームが視線を遮るが、高層階からは名古屋市街が遠望できる。荒野と先進をあわせもった、何とも不思議な未来異空間にタイムスリップした錯覚に陥る。まだ「街」とも言えず、それこそこれから「街」となっていくのである。

じつはこの三角地帯は、「ささしまライブ24」と呼ばれる名古屋市の都市再開発計画地である。その基本計画になっている「名古屋新世紀計画2010」のコンセプトには、「国

際的・広域的な商業・業務機能などの集積を誘導し、国内外から訪れる人々や市民でにぎわう、交流の場を提供する『国際歓迎・交流の拠点』の形成をめざす」とある。JICA中部も、この理念からこの地に誘致されたのであろう。また二〇〇五年に行われた日本国際博覧会「愛・地球博」（愛知万博）ではサテライト会場にもなった。愛知大学の建学精神とも言える一九四六（昭和二十一年）年の設立趣意書に「世界文化と平和に寄与すべき新日本の建設に適する人材は国際的教養と視野をもつ」とあるように、愛知大学も「国際交流」をめざすこの地がふさわしいと考えたのが、移転理由の一つである。

しかしこの三角地帯の歴史を振り返ってみると、もう一つの国際交流が浮かんでみえる。昔この地は旧国鉄の笹島貨物駅であった。また一九三二（昭和七）年には駅の南に隣接して、中川運河が開削された。それまで都心と名古屋港を結ぶ基幹水路であった堀川の交通量・物流量が限界に達していたため、新しい迂回水路として期待されて造られた。堀川とは水位が異なるので、その調節のため閘門が設けられたことから「日本のパナマ運河」とも言われる。新校舎に近いその松重閘門は、現在



名古屋市の都市景観重要建築物に指定されている。

こうして各地の物資が笹島駅に集まり、そこから中川運河を往来する艀船に積み替えられ、名古屋港から世界各地へ送られた。逆に世界からの物資も、名古屋港・中川運河・笹島駅と経て国内各地に送られた。輸出品は陶磁器・綿織物など、輸入品は羊毛・食料品・肥飼料などであった。そして中川運河は期待どおり、堀川に匹敵、凌駕する重要水路になった。

愛知万博より約七十年前の一九三七（昭和十二）年、名古屋汎太平洋平和博覧会がこの中川運河と堀川と名古屋港に挟まれた名古屋南部の地ですでに開催されていた。当時、川と港は国際交流の窓口と意識されていたので、ここで開催されたのであろう。

現在でも中川運河では、歴史を意識した文化的イベントが開催されている。「中川運河キャナルアート」というこのイベントは、前述した中川運河がかつて世界の物流の大動脈として人々の暮らしに豊かさをもたらしていたことをしっかり踏まえ、そのうえで人間の感性をはぐくむ豊かな水辺空間である運河を舞台に、世

界に未来に向けて輝けるアーティストやクリエイターの活動の場を創出していくことをめざしている。しかし残念ながら「ささしまライブ24」もJICA中部も愛知大学も、一部の教職員と学生を除いて、参加してはいないという。

ともあれ、このような国際交流の拠点であった中川運河だが、一九五〇（昭和二十五）年に笹島―西名古屋港間で開業した西名古屋港線（貨物線）などにとつて替わられていった。この貨物線が、名古屋駅から愛知大学への通学に使われている現在の「あおなみ線」である。「ささしまライブ24」計画は笹島駅と中川運河が物流の中心であったことは指摘しているが、この計画の主要理念の一つである「国際交流」が、まさにこの両者が交錯する笹島の地にじつはすでにあったことにまではふれていない。愛知大学もまた気づいていないのであろう。

表と奥という考え方があろう。新校舎北方向に見える名古屋駅の高層ビル群やJICAに象徴されるのは、表＝Mainの「国際交流」であろう。しかし、一方の南方向の中川運河・あおなみ線から見えるのは、奥＝Baseとなる国際交流の歴史である。訪れた地で、伝統や文化とともに、まず人が思い浮かべるものの一つに、その地との交流の歴史がある。新校舎が「ささしまライブ24」やJICAなどとともに、北も南も、表も奥も、どちらの「国際交流」も考えることによって、より深い国際交流を実現していくことが、今後つくられていくであろうこの「街」に期待されているのではないのか。

新名古屋校舎の足元であるこの「街」には、そのような「国際交流」が、将来に向けて開けているように思う。

松尾 美恵子 ●学習院女子大学教授

「自重互敬」の精神で

一 はじめに

「自重互敬」とは自らを省み、大切にし、お互いを大切にし、敬うという意味で、学習院長の安倍能成が学生・生徒につねに語った人と人との関係の大切さを表す言葉である。

この精神は、女子大学の食堂やティールーム等があり、教職員・学生の集いの場となっている建物につけられた「互敬会館」という名前にも込められている。安倍は哲学者で、夏目漱石門下として文芸評論でも知られ、京城帝国大学教授、第一高等学校校長を務め、その後文相、帝室博物館長を歴任し、一九四六（昭和二十一年）年から約二十年間、院長として戦後の学習院を育てた。

学習院女子大学は一九九八（平成十）年に

発足し、今年度で十五年目を迎える若い女子大学である。だがその背後に、一八四七（弘化四）年、公家の子弟の教育機関として設立された京都の学習院、一八七七（明治十）年、華族の学校として開校した近代の学習院の歴史があり、また一八八五（明治十八）年創設の華族女学校以来培ってきた女子教育の伝統がある。直近では一九五〇（昭和二十五）年戸山の地に設立されて半世紀、女子大学へバトンを渡した学習院女子短期大学の歩みがある。その百六十年余の歴史は日本の近現代史と深く関わっている。

二 学びて時にこれを習う、

またよろこばしからずや

学習院という名前は『論語』の「学而時習之、不亦説乎」の文言に由来する。京都の御





承し、孝明天皇（在位一八四六～六七）のとき実現した。初め学習所、修学所などと呼ばれていたが、一八四九（嘉永二）年に「学習院」の勅額が下賜され、正式名称となった。幕末に尊王攘夷運動が高揚した時期には、公家と尊攘派の交流の場となり、政治の場ともなった。

三 我邦女学ノ制、未ダ立タザルヲ以テ、 婦女多クハ事理ヲ解セズ

一八六九（明治二）年の版籍奉還後、公家・大名（諸侯）は華族と称されることになった。一九七一（明治四）年、政府は廃藩置県を断行し、旧大名である知藩事に東京居住を命じた。京都の旧公家も同様である。同年明治天皇は華族に勅諭を下し、「国民中貴重の地位」にある者の心構えを示し、海外への留学を勧めた。その中で、

我邦女学ノ制、未ダ立タザルヲ以テ、婦女多クハ事理ヲ

所の近くに建てられた公家の学校は光格天皇（在位一七八〇～一八一七年）が構想し、仁孝天皇（在位一八一七～四六）年）がその遺志を継

正 門



解セズ、殊ニ幼童ノ成立ハ母氏ノ教導ニ関シ実ニ切緊ノ事ナレバ、今海外ニ赴ク者、妻女或ハ姉妹ヲ挈テ同行スル、固ヨリ可ナル事ニテ、外国所在、女教ノ素ヨリアルヲ曉リ、育児ノ法ヲモ知ルニ足ルベシと述べた。「わが国の女子に対する教育の制度はまだ整っていないので、女子の多くは事の道理がわかっていないが、子どもの成育に母の影響は大きいから、留学する者は妻や姉妹を同伴し、外国の女子教育、特に育児法を学ばせるのがよい」といった意味である。国家に有用な人材を育てるには、まず賢母を育てなければならぬという考え方のもと、女子教育の必要性が認識されている。

一八七四（明治七）年、華族の有志が出資して華族会館を創設し、中に講義局・勉学局などが置かれ、学術・教育の場とした。そして一八七六（明治九）年、華族会館として華族のための本格的な学校を設立することになり、東京府神田錦町（現・千代田区）の宮内省官有地を借用して校舎を建設し、翌年完成した。その正門として鑄造されたのが現在学習院女子大学・女子高等科・女子中等科のある学習院戸山キャンパス（新宿区）の正門となっている鉄門である（この門はのち鐘ヶ淵紡績株式会社東京工場の門となり、一九二七「昭和二」年学習院創立五十周年に際して学習院に戻され、目白構内にあったが、一九五〇「昭和二十五」年現在地に移設された。一九七三「昭和四十八」年、国の重要文化財に指定された）。

一八七七（明治十）年十月十七日、明治天皇・昭憲皇太后を迎えて開業式が挙行された。校名は勅諭により学習院と定められ、京都時代の勅額を賜った。初代の校長には学校設立に尽力した立花種恭（元陸奥国下手渡藩主・幕府官僚）が就任した。

当初の学制は男子小学・女子小学・中学で構成されていた。小学は男女とも六歳で入学し、修業年限は八年であった。男子と女子の教室は玄関を挟んで校舎の左右に分かれていた。

男子は小学卒業後、さらに修業年限八年の中学に進んだ。女子は小学までであったが、中学の科目を選択受講することができた。ただし女子の就学人数は男子の三分の一に満たなかった。

四 金剛石 水は器

一八八四（明治十七）年、華族令が公布され、公・侯・伯・子・男の五等級の爵位が定められた。国家に功績のあった者が華族になれるようになり、華族の数が増加した。一八九〇（明治二十三）年に開設されることになった国会の上院（貴族院）の土台づくりであった。そうした動きの中で、一八八

金剛石

金剛石も

珠のひかりは

人もまなびて

まことの徳は

時計のほりの

わくろかことく

回かけをしみて

いかなるわさか

水は器

水はうづはに

そのさまさまに

人はまじはる

よきにあしきに

おのれにまざる

えらひもめて

こころの胸に

みかかすは

そばさらむ

のちにこそ

あらはるれ

たえまなく

時のまの

ばけみなは

ならさらむ

水は器

したかひて

なりぬなり

友により

うつるなり

よき友を

もろともに

むらうらて

す、めかし

四（明治十七）年四月、学習院は華族会館が経営する私立学校から、宮内省所轄の官立学校となり、男子のみの教育機関となった。華族女子の学校、華族女学校は別に設立されることになり、当時桃夭女塾を開いて上流階級的女子教育にあたっていた下田歌子が宮内省御用掛となつて準備を進めた。校舎は四谷区四谷尾張町（現・新宿区）に建設された。

一八八五（明治十八）年十一月二日、昭憲皇太后を迎えて華族女学校の開校式が行われた。学習院と同じく宮内省管轄の官立学校で、二代学習院長の谷干城（陸軍軍人、西南戦争のとき熊本鎮台司令長官）が校

長を兼任し、下田歌子が幹事兼教授に就任した。

華族女学校の教育は良き妻、賢い母となるため、「彝倫いりんを本とし、女子に適したる學術技芸を教授」することになった。「彝倫」とは人としてつねに守るべき道といった意味である。皇后からは、友人と切磋琢磨し、学習に励むことの大切さを詠んだ「金剛石 水は器」の「御歌みうた」を賜った。

入学した生徒は当初百三十三名であったが、二年後には二百十四名となり、校舎が手狭になったため、新たに麹町区永田町（現・千代田区）に新校舎が建設され、一八九九（明治二十二年）に移転した。対象とする生徒は、満六歳から十八歳までの華族の女子であったが、華族以外にも門戸を開いた。学制は小学科六年、中学科六年で、その上に専修科も設けられた。一八九四（明治二十七年）年には幼稚園も併設された。

華族女学校では下田歌子をはじめ、津田梅子（日本最初の官費留学生、津田英学塾を創設）、石井筆子、野口ゆかといった教育分野で名を遺した女性が教鞭を執っている。またいち早く体操教育を取り入れ、運動会も開催した。女子に体操は不要という考え方もあった当時、それは画期的なことであった。通学服は和服が多かったが、その場合には袴を着用し、靴を履くこととされた。この服装はその後一般の女学生に広まった。

一九〇六（明治三十九）年、華族女学校は学習院と合併し学習院女学部となった。初代女学部長には下田歌子が就任した。一九一二（明治四十五）年、火災により本館が焼失し、

仮校舎が建てられたが、校地も狭かったので移転することになった。一九一四（大正三）年、赤坂区青山（現・港区）に校地を得、一九一八（大正七）年、校舎が完成した。この機に学習院女学部は学習院から独立し、女子学習院となり、十一月十四日開院式が催された。

文部省の教育行政下になかったことから、当時の女子学習院の教育制度は、官立でありながら、学年の開始時期を四月と十月の二回とした二重学年制をとったことや、小学科と中学科の区別をやめ本科十一年制（前期四年、中期四年、後期三年）としたことなど、女子の心身の発達段階を考慮した極めて特色あるものであった。従来の専修科は高等科と改称した。高等科生は共通教科のほか、文科・理科いずれかの教科を選択履修した。

五 燃ゆる火の火中に死にて

また生るる不死鳥のごと

一九三七（昭和十二）年に日中戦争が始まると、学校教育の場にも戦時色が強まった。一九四一（昭和十六）年には戦時体制に即した教育改革により、従来の尋常小学校は国民学校に改められた。女子学習院でも本科十一年制を改め、前期一年から中期二年までを六年制の初等科に、中期三年から後期三年までを五年制の中等科に改めた。高等科は選択教科により文科・理科・家政科に分かれた。家政科のコースができたことで、これまで本科卒業生の三分の一程度であった高等



科への進学者が増加した。

日米開戦後には女子学習院でも勤労勤員が常態化し、通常の授業はしだいにできなくなった。戦局が悪化した一九四四(昭和十九)年には集団疎開が行われ、東京に残った中等科三年以上の生徒はもっぱら勤労作業に従事した。疎開学園においては、一般の学校では敵性語として授業がなかった英語・フランス語の授業も続けられたが、これは学習院創立期

からの世界に目を向ける精神を表すものであろう。

一九四五(昭和二十)年五月二十五日夜から翌日にかけての東京山の手への大空襲で青山の校舎は一部を残して焼失した。そのため目白の徳川義親邸を借りて六月には授業を再開

した。八月十五日、終戦の日の昭和天皇のラジオ放送は同邸書院前庭に集まって聴いた。その後音羽の護国寺の一部も借用した。

疎開した生徒たちが戻ってくると、仮校舎はたちまち手狭になった。とはいえ青山の校地に新校舎を建設することは難しく、女子学習院は大崎にあった旧海軍大学の校舎の使用願いをGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)に提出した。しかし、GHQの教育政策部門であるCIE(民間情報教育局)は学習院・女子学習院に対する調査を進め、両学習院は身分制度を維持していこうとする機関であり、公立学校が校舎を必要としているときに特権階級の教育組織に建物の使用を許可すべきではないとして、この願いは認められなかった。旧海軍大学の校舎の使用を断られた女子学習院は、一九四六(昭和二十一年)三月、土地建物が当時宮内省の管轄下にあった牛込区戸山町(現・新宿区)の近衛騎兵連隊跡に移転した。両学習院はGHQの民主化政策に応じた学制の改革を検討し、華族の子女のための教育機関から、一般に広く開かれた学校として生まれ変わるようになった。そして宮内省から離れ、財団法人を設立し、私立学校として存続を図る方針が固まった。両校と宮内省の関係者はCIEと幾度も折衝を重ね、一九四六(昭和二十一年)十月、両学習院の存続が認められた。新学習院発足にあたっての大きな問題は両学習院の合併問題で、女子学習院は並置することを望んだが、財政状況がそれを許さず、一九四七(昭和二十二年)年三月、財団法人(一

九五―「昭和二十六」年学校法人）学習院が発足した。両学習院の初等科は合併して男女共学となり、中等科・高等科は男女別学のまま六・三・三制の新制度に移行した。また旧制学習院が七年制高校であったため、一九四九（昭和二十四）年四月、目白に学習院大学が設置された。

厳しい財政状況の中、先頭に立って新学習院の基礎を築いた安倍能成は一九五一（昭和二十六）年、自ら学習院歌を作詞している。見出しに掲げたのはその冒頭である。安倍は「小ざくら」という初等科の文集で、子供たちにその意味を説明し、戦争で校舎は焼け、皇室の庇護を離れて私立学校となったが、その焼け跡の上に、先生と生徒と力を合わせて、新しい学習院をつくりあげていこうと呼びかけ、広い視野をもって、「真理と平和とを永久の光導きと仰」ぎ、現実の艱難に屈せず、めいめい自分の力を養い、社会に奉仕する人間になる」と説いている。

六 自由に立ちて責任を行ふは男女を問はず 人間の本分である

これは一九六四（昭和三十九）年、安倍が短期大学卒業生に送ったものである。

女子学習院の時代、すでに高等女学校と同程度の中等科の卒業者を対象とする高等科（二年）があり、一九四五（昭和二十）年四月、さらにその上に研究科（一年）も設けられたが、戦後、両学習院の統合と学制改革の過程で、女子の高等教育

機関は消滅した。新設の学習院大学は男女共学であったが、女子高等科からの進学者は少なかった。大学は男子のための教育機関であるという戦前の意識が残っており、また四年の修学年限は婚期を控えた女子には長すぎるという考えも強かった。一方でより高度な教育を求める声もあり、一九四九（昭和二十四）年、学校教育法が改正されて、短期大学が設立できることになったとき、学習院にも女子短期大学を設置してほしいという要望が盛り上がった。いったん財政事情等から見送られそうになったが、女子高等科三年の父母の強い要望が通り、一九五〇（昭和二十五）年に女子短期大学が設立された。

戸山キャンパスに誕生した短大（当初短期大学部と称した）は、はじめ文学科（国文学専攻と英語専攻）のみで、翌年家庭生活科が設置された。初代部長（学長）は安倍と同じ漱石門下のドイツ文学者小宮豊隆であった。一九五二（昭和二十七）年三月、短大は初めての卒業生を送り出した。

その後、社会的なニーズに応じ、国文学・英文学・英語・文化史・食物・服飾の専門コースをもつ短大として発展した。そして半世紀の時を刻み、一九九八（平成十）年に開学する学習院女子大学の母体となったのである。

今後、時代は変わっても、見出しの言葉のように、学習院の自由な学風を守り、社会的な責任を果たすことができる人材を育てていきたいものである。

ランチタイムに喜びを

叶内 孝 ●東洋大学管財部管財課課長補佐

今から約七年前の平成十七年四月、東洋大学白山キャンパス六号館の運用を開始するとともに、千三百席を有する巨大学生食堂をオープンした。広々とした食堂ホールに個性的な七つの店舗、近年の大型ショッピングセンターのような商業施設を思わせるフードコートスタイルをとっている。何よりこのスタイルの楽しみと魅力は、友達同士で来て、それぞれが好みの店舗で買ったもので同じテーブルを囲めることだ。

毎日多くの学生でにぎわい、昼休みともなるとほぼ満席になる。今ではすっかり定着している施設だが、この学生食堂完成の背景には、東洋大学の歴史の中での大きな取り組みがあった。

かつて東洋大学では、文系学部を教育を一・二年生は埼玉

県の朝霞キャンパス、三・四年生になると都内の白山キャンパスで行っていた。しかし、学生にとっても大学側にとっても多くのデメリットがあり、全学年の一貫教育は大きなメリットと相乗効果を生み出すと考えていた。そこで本学は、「工業等制限法」の撤廃を経て、平成十七年度から文系学部の白山キャンパス統合を行うことを決定し、平成十五年から、このための校舎をすでに取得していた隣接地へ増築することに着手した。このときに建築された大規模校舎が東洋大学六号館であり、延べ床面積は二万平方メートルを超えるものであった。そしてこの地下部分に巨大食堂は誕生した。

白山キャンパスの学生数は約一万三千人、朝霞キャンパスの学生は約八千人、合計すると二万人を超える学生が狭隘な白山の地に通うこととなる。当時、統合前の状態では想像がつかなかった。二万平方メートルの校舎増築をもつてもキャパシティ不足の不安は解消しないものであり、当然、教室数の不安と同時にアメニティ面での不安もあった。

六号館の食堂は、計画当初は現在の大きさほどではなかった。契約図面では現在の約三分の二の広さで、今より小さなものであった。建設を進める中で、朝霞キャンパスの八千人の統合にあたり、学生アメニティを充実させようという声が学内から挙がった。確かに学内では憩いの場所が少なく、雨



でも降れば行き場がなくなってしまうほどだった。少しでも居場所を確保してあげたいとの思いは強かった。一方、食堂を拡張することは、その分教室を削ることとなる。現にこの拡張で食堂へ転用となる教室は三教室（合計収容は四百五十人を超える）もあった。大学として最も重要な施設である教室を削ることは大変な検討事項。授業環境は最優先であるが、アメニティも欠かせない。検討の結果、食堂ホールを拡張を選択した。結果として今の広さの食堂が存在することとなった。

拡張計画の決定とともにフードコートスタイルの採用の話が挙がった。「学生が昼食を楽しむに大学へ来るような食堂をつくろう」を目標に、関係部署それぞれ力を合わせてつくりあげてきた。ただ、建物の施工途中

でフードコートスタイルの採用が決まったことから、苦労は多かった。厨房の増設や個々の厨房が狭いこと、店舗ごとの食器洗浄施設がないことなど数々の問題点があったが、入店するテナントと大学の運用面での歩み寄りによってそれぞれをクリアすることができた。

日常の運用についてはテナント側の努力も大きい。学生の昼休みは五十分間、短時間に集中して混み合うため、店舗ごとのオペレートも工夫を凝らし、待たせることなく素早く提供できるメニュー、盛り付けをしている。また、入店しているテナントはすべて外食業界での経験を有する。都内に実店舗を構えているテナントもあり、そのノウハウとこだわりを生かした本格的なメニューを提供している。品質としては外食店舗レベルでありながら、価格設定をワンコイン（五百円）としているので、各店舗はこの価格で提供できる内容が競われる。これも提供するメニューが充実するポイントである。

大学・テナントそれぞれが、「学生が喜ぶ食堂を」という思いをどれだけもって運営しているかが最も大切と考える。それが満足度の評価に大きくつながる。今後もこの精神をもち続けながざり学生の喜びも続かないであろう。この食堂をオープンさせたときの学生たちの笑顔は、それまでの苦労を忘れさせてくれるものであった。使う側の喜びは、つくる側の喜びでもある。あまりにも単純なことであるが、つねに忘れてはならないことだと感じている。

大学食堂リニューアルプロジェクト

雨宮 美和子 ● 東洋英和女学院大学事務部長

東洋英和女学院大学は、横浜市緑区に五万坪のキャンパスをもつ女子大学である。緑に囲まれ、周りは住宅地で飲食店はないため、学生食堂に対する大学のコンセプトは、学生食堂は学食利用者だけのためではなく、お弁当持参者にもよそで買ってきた昼食を食べる者にも開放し、学生たちが昼食を共に食する場としている。二千三百余名の学生たちは二つの食堂をゆつたりとその日の気分、予定によって使い分け、友人たちと楽しく食事をしている。

キャンパスの中央に位置する中央館食堂は、二十五年前に建てられた建物の一階にあるが古色蒼然とし、女子大学のイメージからかけ離れた食堂になっていたため、二〇一〇年に改修を行った。通常であれば大学主導で改修工事を進めていくのだが、この改修に学生たちを参加させて実業教育の場にしたいと考え、学生自治会清楓会に声をかけたら、二年生（当時）の役員六名が名乗りを上げてスタートした。

本学では、五年前から「学校案内」の分冊としての「学生ブック」を、在学生が業者と一緒に作って作り上げている実績がある。高校生に伝えたい大学の魅力を学生が意見を出し合って、最初から最後まで責任をもって編集作業をしている。「学生ブック」はこれまで五冊刊行しているが、高校生の評判は良い。編集スタッフになった学生にはインターンシップ以上の成果があり、実業教育の場になっている。この実例があったので、食堂改修にも取り入れた。

発注した業者は最初は戸惑ったが賛同してくれ、コンセプトの立案から床・壁・天井の仕様決定、什器のレイアウトなど、すべての仕様をワークシopp形式で決定した。

ワークシoppは、学生メンバー六名と設計担当者二、三名で昼休みの一時間を使って行われた。ワークシoppでは、学生から発言できるよう業者の方は毎週宿題を出し、宿題を発表することから始めるという仕掛けを考え、進めていった。三カ月間で週一回、合計十回のワークシoppを実施した。手を挙げてくれた六名は、インテリアやデザインに興味がある学生たちであったが、何より学生食堂を「学生たちのコミュニティ」の場にしたい」という思いが強かったようだ。友人たちの意見も聞き、より良い学生食堂作りを考えていっ



た。昼休みの一時間だけでは足りず、ワークショップ以外にも時間を持ち、納得がいくまで意見交換を行い次のワークショップに備えた。それぞれ違う意見を一つにまとめていく難しさを知り、その中でチームワークやコミュニケーションを学びながら、学生食堂改修計画が進められた。

コンセプトは「居心地が良く、愛される学生食堂」。

デザインコンセ

プトは「EYE

TO EYE」。

スクールカラー

であるガーネット

色と白色を用い、

東洋英和らしさを

表現するために校

歌をデザインモチ

ーフにし、女性の

成長の過程での目

線と目線を表現す

ることで、コミュ

ニケーションを学

ぶ大学のイメージ

を表現した。利用

しながらの問題点、動線の問題も着目し改善し、緑に囲まれた英和らしいシンプルでナチュラルなイメージに仕上がった。ソファやカウンター席も配置し、食事以外でも大いに利用され、「居心地が良く、愛される学生食堂」になった。

●ワークショップに参加した学生メンバー

青木 梨里花（国際社会学部国際社会学科）

コン 尹宣（国際社会学部国際社会学科）

乗杉 花乃（人間科学部人間科学科）

平岡 詩織（人間科学部人間科学科）

宮郷 瞳（国際社会学部国際社会学科）

安富 詩穂（国際社会学部国際社会学科）

この大学食堂リニューアルプロジェクトは、

・環境色彩コンペティション「グッド・ペインティング・

カラー改修部門特別賞」

・SDA賞（サイン等のデザインを審査する賞）入賞・関東

地区賞

「最初から最後まで学生主体のワークショップ実施による学生とのコンセプト共有および色への落とし込み作業は色彩計画の教育に貢献しており、今後の規範となり得るもの」と高く評価され、受賞に輝いた。

学生の目線での学生食堂の改修は、学生の評判も良く、コンセプト通りの「心地良い居場所」として親しまれている。